

事例4

大分県 豊後高田市立香々地小学校

# 日課表の工夫で教員の主体性を高め、特色ある学校づくりを実践

大分県の豊後高田市立香々地小学校では、「深い学び」「協働の学び」の実現を目指し、2017年度、午前5校時・7校時制を導入した。英語教育を中心に、教育活動の特色化を図るとともに、担任が自由に裁量できる授業時間を設定。教員一人ひとりが主体的に授業改善に取り組むようになっている。



© 1875（明治8）年設立。2012年度から文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、全学年で英語教育を推進。2015年度から豊後高田市教育委員会指定のコミュニティ・スクール。

校長 中島享子先生  
 児童数 59人  
 学級数 7学級（うち特別支援学級1）  
 電話 0978-54-2017  
 URL <http://syou.oita-ed.jp/takada/kakazi/>



校長  
中島享子

なかしま・きょうこ  
 豊後高田市の公立小学校教諭、教頭等を経て、2019年度から現職。



前校長（現・豊後高田市立真玉小学校校長）

瀬口卓士

せぐち・たくじ  
 豊後高田市の公立小学校教諭、同市教育委員会学校教育課長等を経て、2019年度から現職。

## 学校教育目標の設定

### 協働、英語教育と、学校が進む道を明確に示す

大分県の国東半島に位置する豊後高田市立香々地小学校は、児童数約60人の小規模校だ。豊かな自然に囲まれ、子どもたちは明るく素直で、学習にもしっかり取り組んでいる。一方で、学習に対してやや受け身的で、コミュニケーション能力に課題が見られていた。2017～18年度に同校の校長を務めた瀬口卓士校長（現・同市立真玉小学校校長）は、次のように語る。

「本校の校区は子どもの数が少なく、幼少期から同じ友人と過ごすため、自分から何かを伝える必然性を感じる場面があまり多くない状況でした。幸い、校区に移住者が増え、その子どもたちから刺激を受けるようになったので、そうした変化を生かして子どもたちの対話の機会を充実させようと考えました」

そこで、瀬口校長は、学校教育目標を「アクティブに学び クリエイティ

ブに表現できる 感性豊かな香々地っ子の育成」と設定（図1）。他者の思いを聞き、聞いた後に考え、そして行動するという3つの動きを教育活動に積極的に取り入れることにした。学校教育目標に英語の言葉を入れた理由を、瀬口校長はこう説明する。

「本校は、文部科学省の『教育課程特例校』の指定校として、2012年度から全学年で、外国語活動を行ってきました。子どもたちが英語でコミュニケーションできるという特色を、子ども自身や地域に意識してほしいと考えたのです。また、新学習指導要領に先駆けて、英語教育の先

進的な取り組みを行っていたので、英語教育の特色化をより図っていきたいという意図もありました」

重点目標を「深い学び」「協働の学び」としたのにも、瀬口校長の強い思いがある。

「人は1人では学べません。他者に認められたいと思い、誰かと一緒に活動することで、継続する意欲が続いていくものです。つまり、学びの根本にあるのが、周囲のかかわりと

図1 香々地小学校の学校教育目標、重点目標

#### 学校教育目標

アクティブに学び クリエイティブに表現できる  
 感性豊かな香々地っ子の育成  
 ～チーム香々地 聞こう！ 考えよう！ そして行動しよう！～

#### 重点目標

- ① 深い学びを実現するための思考・判断・表現力の育成
- ② 協働の学びを実現するための自主性・協調性の育成

\*香々地小学校提供資料を基に編集部で作成。

支えなのです。協働を目標に掲げることで、子ども同士、子どもと教員、子どもと保護者、子どもと地域がつながり、みんなで向かうという共通認識を持ちたいと考えました」

瀬口校長は、学校教育目標の意図を職員会議などで繰り返し説明し、全教員の共通理解を図っていった。

## 日課表の改訂

### 英語の授業時数増、学習の深化を図るため、40分授業に

カリマネの視点での見直しを早急に図ったのが日課表だ。2017年度に検討を始め、3回の試行期間を経て、2018年度から「香小チャレンジ日課表」を全面実施した。改訂のねらいは、次の4つだ。

#### ①集中力のある午前中に学習を行い、学力向上を目指す

#### ②放課後にゆとりを持たせ、子ども同士及び子どもと教員の向き合う時間を確保する

#### ③新学習指導要領の円滑な実施に向けて授業時数を確保する

#### ④文部科学省の教育課程特例校としての体制を整備する

具体的な改訂内容は、始業時刻を10分早めるとともに、授業時間を従来の45分間から40分間に5分短縮。子どもの集中力のある午前中に5校時分の授業時間を設定し、1日の授業時数を、1～3年生は毎日6校時、4～6年生は水曜日を6校時、他の曜日を7校時とした(図2)。そして、全学年が6校時で終わる水曜日の放課後を教員研修の時間に充てた。

「本校の児童数は、1学級10人前後です。授業中に一人ひとりの子どもが発言して、教員が机間指導する時間も確保できると判断し、授業時

間の5分間の短縮に踏み切りました。そして、先生方に小規模校の強みを生かして、『深い学び』『協働の学び』の実現に向けた工夫をしてほしいと呼びかけました。40分授業に転換していく過程は、先生方一人ひとりが自身の授業内容を見直すきっかけにもなったようです」(瀬口校長)

日課表の工夫によって捻出された時間は、1週間あたり90～125分、授業時数に換算すると2.0～2.8時間となった。そこで、6校時は全学年で45分間とし、10分間の「Eタイム」、35分間の「スキルタイム」で構成することとした。

「Eタイム」は、英語の帯活動の時間だ。会話を中心とした学習を毎日積み重ねて、英語に十分慣れ親しむことをねらいとしている。

一方、「スキルタイム」は、担任が学級の状況に応じて学習内容を決められる時間だ。通常授業で理解が十分でなかった部分を再度学習したり、運動会の前には体育、絵画コンクールの前には図画工作を行事と関連させて行ったりしている。

「担任の裁量で使える時間を設けたことで、週単位、1日単位で、授業を振り返って、指導を改善したり、さらに深い学びを行ったりするなど、それぞれの先生が授業の質の向上に主体的に取り組むようになったと感じています(写真)」(瀬口校長)

## 教育活動の拡充

### 1回目の子どもの声を受け、中国との交流会を年2回実施

授業時数の増加により、多様な教育活動に挑戦する時間も生まれた。

例えば、2018年度の1学期と3学期に、中国の小学4年生～高校2年生の修学旅行団の誘いを受け、同校の全校児童と英語による交流会を実施した。同校は都市部から離れて

図2 4～6年生の日課表(水曜日を除く)

時間	内容
8:15～8:35	朝読書・朝の会
8:35～9:15	1校時
9:15～9:20	休み時間
9:20～10:00	2校時
10:00～10:05	休み時間
10:05～10:45	3校時
10:45～10:50	サーキットタイム
10:50～11:05	中休み
11:05～11:45	4校時
11:45～11:50	休み時間
11:50～12:30	5校時
12:30～14:00	給食・昼休み・掃除・休み時間
14:00～14:10	6校時 Eタイム
14:10～14:45	6校時 スキルタイム
14:45～14:50	休み時間
14:50～15:30	7校時
15:30～15:40	帰りの会

元々、子どもは7時50分～8時10分に登校していたため、10分早めても問題ないと判断。

5校時分を1校時40分間とし、子どもの集中力のある午前中に国語・社会・算数・理科の授業を行う。

サーキットタイムは、校庭などで体を動かし、体力向上を図る時間。中休みと合わせた20分間、外で運動している子どもが多い。

英語の帯活動の時間。会話練習やチャンツ等を毎日行い、英語を使う感覚を染み込ませていく。

スキルタイムは、担任が自由に活用できる時間。学習の進度や行事などに合わせて、その時々に必要な学習を行う。

教員の退勤時刻は16時40分。働き方改革にもつなげている。

水曜日のみ6校時までで、帰りの会は14:45～14:55。なお、1～3年生は、毎日6校時までで、帰りの会は14:45～14:55となる。  
\*香々地小学校提供資料を基に編集部で作成。



**写真** 6年生の算数の授業では、グループ学習を中心に展開している。まず、1人で演習問題に取り組み、答えを考えてから、グループでその答えを出して学び合う。そして、グループの代表が黒板の前に出て、解き方とその理由を述べる。

いるため、子どもたちがALT以外の外国人と交流できるよう、誘いを受け入れたのだ。

当初は、1学期のみの予定だったが、子どもへの事後アンケートで「英語で思うように表現できなかった」「もっと英語の学習を頑張りたい」という声がたくさんあったため、3学期にも行うことにした。

「2回目の交流会が決まると、子どもたちは1回目の課題を踏まえ、中国の子どもたちをもてなそうと、英語の授業や『Eタイム』に一層熱心に取り組んでいました。そして、2回目の交流で、子どもたちが中国の子どもたちと熱心に、生き生きと、楽しそうに話す姿を見て、これこそが生きたコミュニケーションのための経験だと感じました」(瀬口校長)

### 家庭・地域との連携

## 家庭や地域の声を学校を変える原動力に

家庭や地域との連携も、カリマネに位置づけて進める。その中心となるのが、保護者や地域住民らで構成される学校運営協議会(コミュニティ・スクール)だ。7校時制が実現したのも、地域としっかり連携できていたからだ、瀬口校長は語る。

「7校時制を学校運営協議会に提案したのは、私が着任して間もない頃でした。そして、その提案が、保護者や地域に認められたことが、校内

での実践の原動力になりました。公立学校は数年単位で担任も管理職も異動します。そうした中、教員が入れ変わっても持続可能なカリマネを実現する鍵となるのが学校運営協議会だと考えています」

### 教育委員会の支援

## 校長と市長の意見交換会を実施 引き継ぎの方法も明確化

カリマネをチェックする過程では、客観的な指標による実態把握を重視している。そこで、文部科学省「全国学力・学習状況調査」(6年生で実施)と大分県の学力調査(5年生で実施)、豊後高田市の学力調査(3～6年生で実施)に加え、学校独自の学力調査を1・2年生で実施して、全学年で学力を把握できるようにした。さらに、6年生全員が英語4技能検定「GTEC Junior」\*を受検。2018年度からは、5年生でも英語の学力調査を受検している。それらのアセスメントの結果は、全教員で分析し、指導改善に生かしている。

「子ども一人ひとりの課題を明らかにし、実態を把握することで、教員は自身の指導を客観的に振り返ることができます。『深い学び』『協働の学び』の実現という重点目標を教員一人ひとりが意識し、指導改善を図っていくことで、カリマネが充実していくと考えています」(瀬口校長)

豊後高田市教育委員会の施策も、

カリマネの推進につながっている。その1つが、市長と全市立学校の学校長が一堂に会して行われる意見交換会だ。毎年5月に行われる会では、各学校長が自校の特色やビジョン、年間の学校運営方針などを、市長にA4判用紙1枚、3分間で説明する。他校のビジョンを聴き合い、学び合う中で、自校の改善に結びつけることができる。

「当日説明する内容を準備する過程で、保護者や地域との関係も含めた学校の実態が整理され、自校に必要な教育活動が改めて明確になります。また、過去の意見交換会の資料を見れば、着任したばかりの校長でも、学校の強みや課題がよく分かります。それまでの取り組みや振り返りを踏まえ、自分が何を目指すかを検討できるのです」(瀬口校長)

さらに、校長の異動に際しては、後任の校長への引き継ぎを対面で数回行う機会が設けられている。

「校長が代わる度に指導方針が大きく変わると、先生方は混乱してしまいます。それまでの取り組みを引き継ぎ、連続性のある学校づくりを行うことが、カリマネの継続・発展につながると考えています」(瀬口校長)

2019年度、同校に赴任した中島<sup>なかしま</sup>享子<sup>きょうこ</sup>校長は、学校教育目標や重点目標は前年度のものを継続し、研究指定を受けた言語活動を校内研修のテーマに据えた。毎月、教務主任が言語活動の到達目標を設定し、職員会議などで指導の振り返りを行っている。

「40分間の授業時間に、言語活動を行うタイミングや頻度などについて議論を重ねています。そうして、先生方とともに教育目標『アクティブに学び クリエイティブに表現できる 感性豊かな香々地っ子の育成』を進めていきたいと考えています」(中島校長)

\* ベネッセが提供する、小・中学生を対象とした、タブレットで受検するスコア型英語4技能検定。